

通信小海

四川被災地訪問

牧師 水草修治



中国四川大地震の被災地を訪問した。北京經由で成都に、成都から被災地まで車で二時間であった。オリンピックを控えた北京は高層ビルが林立し、かつて三国志の英雄劉備玄德が蜀の都とした成都も首都として繁栄しているだけに、被災した農村地帯の町村との落差の大きさに愕然とさせられた。

被災地の七つの町村を訪ねたところ、町々は爆撃に遭ったようなありさまだった。瓦礫の山と化した建物がある一方で、遠くから見ただと大きな被害がないような建物も実際に近づくとことごとく危険で、もはや居住

今月の御言葉
「あなたはどこから来て、どこへ行くのか。」創世記十六章八節

することができなくなっており、町の人々は青テント住まいだった。崩壊した家屋はレンガ積みで、一階建てなら鉄筋は皆無、二階建てでも鉄筋が二三本入っている程度であるから、地震がくればひとまりもなかったわけである。また山岳地の村は、山崩れで全戸被災し、村民は平地の仮設住宅に集団疎開していた。

片親もしくは両親を失った子どもたちの住む仮設住宅を訪ねた。彼らは片親か祖父母と暮らしていた。部屋は十畳程度の土間で、家財道具は冷蔵庫とバケツ二個といった具合だった。中国人たちはエネルギーシユな人たちではあるが、さすがに地震で失った夫や妻、父や母、息子や娘のことを話すときには涙していた。

政府の掛け声は、一年目は基本的な復興、二年目は向上、三年目は新しい町の建築ということであった。しかし、現実はいへん

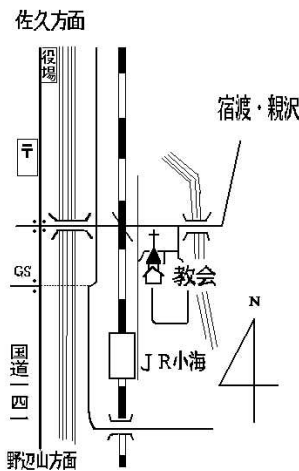
日本同盟基督教団 小海キリスト教会 牧師 水草修治

会堂・牧師館 南佐久郡小海町大字小海四三三五 二七

〒三八四一一 二 二六七九二四七七六

〒振替 〇〇530 〇 61683

見晴台の教会へどうぞ



集会あんない

日曜日 朝礼拝 午前十時から十一時半
夕礼拝 午後八時から九時

*海尻・川上・南相木で毎月「反省会」をしています。

個人的な聖書勉強や個々・白たこ林記にも乗ります。

厳しいという印象であった。なにしろ被災面積がおよそ北海道ほどもあるのである。復興にはいったいどれほどのお金と時間が必要であろうか。政府がオリンピックを成功させて中国経済をさらに上潮に乗せたいと考えるのも無理はない。

しかし、課題は物質だけではない。周知のごとく中国では一人っ子政策を押し進めてきたので、たった一人の子どもを失った夫婦が茫然自失している。また、地震と悲鳴と怒号と監禁の暗闇の恐怖を経験した子どもたちの多くは心的な外傷を負ってしまったている。

このような状況を見るときに、やはり経済的・物質的な支援をするともに、心のケアが大事だということをつくづく思わされた。

現地ですれまでの高給の職をなげうって、被災地の子どもたちのために物心ともなう支援のための働きを始めている方と出会った。彼の被災者に対する熱心で誠実で優しい姿に胸を打たれた。神の愛に促されてのことである。

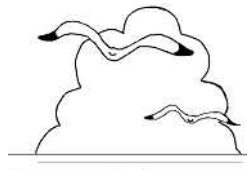
明日はわが身である。日本列島は地震の

活動期のただ中にある。三十年以内に東海地震、宮城県沖地震が起こる確率は、それぞれ八七%、九十九%だそうである。

いろいろ対策が必要であるうが、究極の対策は神の愛である。

「女が自分の乳飲み子を忘れようか。自分の胎の子をあわれまないだろうか。」

たとい、女たちが忘れても、このわたしはあなたを忘れない。」イザヤ書四九・十五



家庭集会

八月十二日（火）午後七時四十五分から
井出博彦さん宅で。Tel 96・2534

南相木でも家庭集会

八月二十七（水）午後二時から

TEL 78・2047

信州から野宿者支援

いつもご協力を感謝します。仕事が入らず、今日明日の食事に窮している人たちがいます。

佐久穂町の方から梅干をいただくことができました。疲労回復、食欲増進に役立ちます。ありがとうございます。野宿者の人は栄養失調で歯が悪いので、やわらかい梅漬けたとさらに感謝です。

送付先 小海キリスト教会にお持ちくださるか、

南牧村社協へ。

〒384-1302 南牧村大字海ノ口966 1

5 南牧村社会福祉協議会 気付 山谷農場

* 着払いによる送付はご遠慮ください。荷札に「木曜午後送付希望」とお書きください。

山谷農場事務局 藤田 寛 小海町芦谷ヒルサ

イドコーポ 一 二号室毎週金曜・土曜はあります。

電話 090・1436・6334

〒384-1302 090・1436・6334

メール nyoro@beige.ocn.ne.jp

カンパ 三振替 一四 四 五三七九六

あせるこも

アブラハムの生涯



神の時を待てずに

カナンの地に来て十年が経ち、アブラムは八十五歳、妻サライは七十五歳となっていた。神の約束によれば、アブラムが神にしたがってカナンに行けば、彼は偉大な国民となるはずであった。それでここ十年、老いた夫婦は、子を得るためにそれなりに努力もしてきたが、サライには一人の子どころか妊娠の兆候さえ皆無だった。サライは焦りを感じた。「私が生まれず女(め)なのは、もともとのこと。でも、このままでは夫のアブラムも子種が尽きてしまう。」

その時、サライは周囲の人々を見回した。当時オリエント世界の人々は、正妻から子を得られない場合には、「借り腹」をして子を得るといふ習慣がなされていた。そんなことは、アブラムもサライもとつくに承知していたが、アブラムは当時としてはめずらしく

若い日から連れ添ってきた妻以外の女に触れずに来たのであり、妻サライもそのことを感謝していたのであった。

けれども、サライは自分が生まれず女であることで、アブラムの血統が絶えてしまうことはなんとしても避けたいと思った。また、神が、アブラムを大いなる国民とすると約束され、かつ自分を生まれず女にしておられるということは、神は自分にこらえよと求めておられるのではないかと解釈した。『私さえこらえれば、アブラムは子を得ることができ、神の約束も成就するのだわ。』サライは自分の感情を押し殺して、理性的に振舞おうと決心したのである。

ある日、サライは夫に言った。「ご存知のように、主は私が子どもを生めないようにしておられます。どうぞ、私の仕え女ハガルのところにおはいりください。たぶん彼女によって、私は子どもの母になれましょう。」

アブラムも実は同じことを考えなくはなかったが、自分からは言い出せずにいたのである。「うむ。わかった。」とサライのことはすんなりと受け入れてしまう。

ハガルという女は、浅黒い肌のなめらかな

エジプト出身の女だった。サライは一族の棟梁となるべき男児を生むのであるから、利発で健康で腰骨の張った立派な体格の女を選んだ。サライはハガルにもちかけた。

「ハガル。おまえが私の代わりに、ご主人様のお子を産むのよ。・・・ただし私のひざの上に。」

一瞬、ハガルの目は大きく見開いたが、その目の光を見られまいとしてか、すぐに目を伏せ頭を下げると、「おことばのままに」と答えた。

その夕方、自ら夫アブラムとハガルの寝所を用意するサライの心のうちには嫉妬の炎が燃えていた。その炎を押し隠して、ハガルに対して親切な女主人らしく振舞うのである。ハガルが沐浴を終え、椅子に腰掛けて長い髪をくしけずっていると、サライは自分がたいせつにしている香料の小瓶をとり、「これを付けなさい」とハガルの手のひらに置いてやった。

西の山の端に日が落ち、闇が迫ると、サライはハガルのいる寝所にはいつて行く夫の背を見送った。サライの胸のうちで一つのガラスの玉が砕けた。

私を見守る神

まもなくハガルはみこもった。日に日に彼女のおなかは大きくなっていく。八十五という年齢になって、生まれて初めて自分の子が生まれようとしている。アブラムはハガルの丸い腹を遠くから見てはにやにやしてしまいう自分を抑えられなかった。わが子を宿したハガルの身に万一のことがあつてはならぬというわけで、ハガルに仕えるしもべたちを付けてやった。

胸と腹をそびやかせて歩き回るハガルは、サライの癪に障った。しかしサライは自らを省みることを知る賢い女である。ハガルが横柄な態度に見えるのは、自分の心持ちのせいだろうと最初は思っていた。だが事実、ハガルは主人アブラムの子を宿して増長していったのだった。

ある日のことサライがハガルを一言戒めたときだった。ハガルはふり返ると言った。

「なにさ。お子を産むこともできないで、なにが奥方さまよ。ご主人様のお子を宿したあたしこそ奥方様と呼ばれる資格をもっているのに。」

サライはハガルの横柄さにたまりかねて

夫に矛先を向けた。「私に対するこの横柄さはあなたのせいです。ハガルは自分ごもったので、私を見下げるようになりました。」

アブラムは言った。「あなたの仕え女だ。あなたの思うようにすればよい。」

夫の許可を得て、サライはなにかにつけハガルにつらく当たるようになった。ハガルは耐えられず、大きなお腹を抱えて家を飛び出してしまふ。

荒野の泉の水面に大きなお腹のハガルの姿が映っていた。サライのもとを飛び出しては来たものの、この先行く当てもない。そこに、神の使いが現れて言った。

「ミニの七ラヂノブル、またたはとこから来て、どこへ行くのか。」

彼女は答えた。「私の女主人サライのところから逃げているところです。」

御使いのことは、ハガルに二つのことを教えている。「サライの仕え女ハガル」というのは、ハガルが一体何者であるのかを告げることである。おのが分を忘れてあたかも女主人のように思い込み、振舞っていたハガルに、自分をわきまえなさいと

いうのである。あせつて分を超えて自分を高く上げようとするのをやめよ。ことを人のせいばかりするのをやめよ。このたびのことは、おまえのあせりと増長が原因だ、と。

「あなたはどこから来て、どこへ行くのか。」とはまた印象深いことばである。ハガルはどこから来たかを答えることはできたが、どこへ行くのかを知らなかった。逃げてきたからである。逃避の人生には目的がない。

御使いは続けた。「あなたの女主人のもとに帰りなさい。そして、彼女のもとで身を低くしなさい。」

御使いが去った後、ハガルはサライのもとに帰った。頭を垂れたハガルにサライは「顔を上げなさい」と言った。サライは驚いた。ハガルの表情がまったく変わっていたのである。高慢と苛立ちに満ちていた顔が、今は、穏やかな表情になっていた。サライは問うた。

「荒野で何があつたの？ハガル。」

ハガルは答えた。

「神が、私を見守っていてくださるお方だと知ったのです。」

